

The Sin of Wit — Jonathan Swift の諷刺の原罪

難波俊裕

（岐阜薬科大学教養科英語）

The Sin of Wit — the Origin of the Satire of Jonathan Swift

TOSHIHIRO NAMBA

English, Department of General Education, Gifu College of Pharmacy

(Received February 27, 1982)

1) Swift's irony is described as superb in that it effects an impression of 'Satirist being satirized' in the phrase of R. Elliot in the *Power of Satire*. The fact being minutely analyzed, it would be found that Swift has contrived a unique style of writing which shows the defective mentality of the values he really has set his aims to attack, a 'transvaluation' at the level of language. The device is liable to be missed by modern readers who are not accustomed to the tradition of the 'Menippean Satire' which used to be common in antiquity.

2) Swift's political ideas are examined with the help of Irvin Ehrenpreis, 'Swift on Liberty,' The Tory notion of politics, based rather on 'landed interest', though it shares the idea of 'tripartite mixed government' with the Whigs, was doomed to decline after the reign of Queen Anne. Indeed the ideas of the political institutions of the Glorious Revolution tended to revive afterward when the constitutional dangers threatened England, but, it being logically impossible to set the politics on the complete balance of 'the one, the few and the many,' the ascendance of the parliament led to the advancement of 'moneyed interest,' And the cause of Swiftian ideals, an amalgamation of modern and medieval notions, was lost as the later history shows.

3) Swift left the centre of government with Harley when the Hanoverian court succeeded. He wanted to remain as he had been or could not but stick to the out-of-date political notions and was to hold the lost cause and stay away from any eminence, except when the Wood affairs broke out to invite him to promote the cause of Irish people by *Drapier's Letters*. Swift might have realized that his cause was lost on his retirement to Ireland, but he expressly apologized that he had desired to 'reconcile Divinity and Wit' in *The Author upon Himself*. By the time, he had formed his mental picture of his age, which we now know is a kind of eschatology. But Swift described it in his satiric attempts in form of scatology, an intention toward *memento mori*.

1. *Swift* のアイロニー

Jonathan Swift の諷刺の核になる倫理的課題は中庸という思想である。両極に対して平衡する立場を重視することは、Aristotle を引きあいに出すまでもなく普遍的でいかにも単純平凡であるが、両極の変化には限界がないから、変動する状況に応じて中庸であることは、また、これほど困難なこともない。

Swift の登場した時代は、逆説的に言えば、中庸という限定しえない思想が有力ならざるを得ない「政争の時代」

でもあった。¹⁾ はなばなしい文書合戦と論争が盛んであって、それをとおして、H. Walpole に代表されるウィッグの支配体制が確立され、トリー党の論客として *The Examiner* で彼が主張した理想はトリー党内閣の終幕とともに遠のいた。ウィッグ体制は、地主階級に替ろうとして、ようやく抬頭した商工業を中心とする勢力であった。その変動の中であって、アイルランドに帰国した以後、彼は最も誠実なアイルランド国教擁護者としての姿勢をつらぬくことになる。

感性的にも、時代は既にデカルトの機械論や分析総合の理論に代表される思考が世に受け入れられており、古典研究においても文献学的精緻な学問が樹立されようとしていた。宗教もその影響下にあり、ニュートンの物理学が同時に神の世界の精巧な秩序の証明と受け取られ、理神論が受容されていた。自然は理性と見事に調和していると考えられた。にもかかわらず、Swift の感性は分析という操作を信ずることが出来ず、物を統一のままで見ようとし続けた。*A Tale of a Tub* (1704) の中でよく引用される「軽信と鑿穿」の対立において、彼は軽信の側を支持しているが、この態度は終生変らなかつた。解体されたとき、その対象が具有していた完全性 (intactness) は既に存在しないという訳である。

政治の中庸を主張する Swift の政治に関する発言は初期の 'The Sentiments of a Church-of-England Man,' に示されている。

……because it is a Point of Difficulty to chuse an exact Middle between two ill Extrems; it may be worth enquiring in the present Case, which of these a wise and good Man would rather seem to avoid: Taking therefore their own good and ill Characters with due Abatements and Allowances for Partiality and Passion; I should think that, in order to preserve the Constitution entire in Church and State; whoever hath a true Value for both, would be sure to avoid the Extrems of Whig for the Sake of the former, and the Extrems of Tory on Account of the latter.²⁾

これは政治(教会と国家)の安定をめざしたものだが、Swift の試行は、文体の上での「仮面」という方法である。彼の諷刺の戦略は、対立する相手の文体を模倣し、それを戯画の手段とする奇抜な業であった。例えば、*Drapier's Letters* で採用した仮面は「衣裳屋」は「取るに足らなくはないがしががない無知な店の主」であった。³⁾ *Argument against Abolishing Christianity* にあっては論者は「国家の平穩のためには国民に儀式を投げ与え貧り喰わせるのが安あがり」とキリスト教の効用を信仰とはかけ離れたところに説く「宗教無意味論者」である。⁴⁾ 最もアイロニカルな仮面を具えた *A Modest Proposal* の論者はアイルランドの困窮をもたらした英国の圧政と人間のエゴイズムとを合理化する財政家である。人口問題を解決する最善の策は、貧乏なアイルランド人夫婦の間に生れた子供を子馬や子牛なみに肥育して英国人の食卓に提供し、母親を肥育競争に駆りたて結婚を利殖の営みに変えてしまおうとする。⁵⁾ これはマルサスを70年も先き取りした人口論であって、その『人口論』が18世紀後半のブルジョア気質から派生、救貧法改正のイデオロギーとなったことを併せて考えても、『提案』がいかに非人道的な仮面を装っているかがわかる。⁶⁾

どんな小品にも Swift は仮面を借りて主張を展開しているので、その数は限りないが、作品すべてに仮面は Swift 自身ではないという装置を用意している。従って、そこに「諷刺家が諷刺される」⁷⁾ という逆転 (transvaluation) が生じる。この逆転をおこなう手段として言語レベルでのアイロニーを指摘できる。

例えば *Gulliver's Travels* の Gulliver は第四部で最も非人間的な狂態を晒す。Houyhnhnms の偽りのない平穩な共同体の秩序に、人間の悪と偽善に圧倒されていた Gulliver は Houyhnhnms に感化されたあまりに馬になりたいという願望の虜になり、帰国してからも妻子の臭にすら嫌悪を感じず。H. Bergson の言う idee fixe が彼を自動人形に換え、人間の現実に不適応となったことを示す。「すべての人間は Yahoos である」という観念は Redriff

に残した家族の苦勞が配慮できないと同様に Don Pedro de Mendez の如き思いやりのある人物にも適応できない⁸⁾これは Gulliver 即ち Swift であると考えれば、見落されて理解されない構成上の逆転の例である。最後のところで作者 Swift は言語レベルの逆転を用意している。

After Dinner Don Pedro came to me, and desired to know my reason for so desperate an Attempt; assured me he only meant to do me all the service he was able; and spoke so very movingly, that at last I descended to treat him like an Animal which had some little Portion of Reason.⁹⁾

（イタリックスは筆者）

「身を屈してやる」という表現に Gulliver の傲慢無礼が見えるのであり、続いて最終頁には「自然に身についた悪行と愚行」だけなら我慢できなくもない「当然のなりゆき」としながら、人間の最大の悪徳は傲慢であり耐えられぬとうそぞく。

…when I behold a Lump of Deformity, and diseases both in Body and Mind, smitten with Pride, it immediately breaks all the Measures of my Patience; neither shall I be even able to comprehend how such an Animal and such a Vice could tally together,¹⁰⁾

このとき Gulliver が人間ヤフーにすぎなく、また同時に Houyhnhnms 自体 Swift の構成の中では「自然の完成」であるという前提を想起すると Gulliver には共鳴できなくなるはずである。「傲慢」とはプラトンの明瞭な自己認識を奪うものである。ここではその自己認識を欠くが故に攻撃している Gulliver 自身の「傲慢」が暴露され、その愚行が豪語の壮大さに比例して重症であることを知り、Swift と共に笑いとばせばよい。

Houyhnhnms は、全く馬であるが、乱されることのない道徳的真観の生活を体現している。彼等自身の中に葛藤は生じることはないし、相互の間に主張を張り合うこともない。情念から全く解放された純朴そのものの生活である。それと全く対照的なのがラガドの学芸院で、そこでは自称科学者が成果を期待できない研究に狂奔している。この対比を考えると、Houyhnhnms には、Swift のある憧憬が託されているとも考えられる。政治という「合理的組織を作ることや、知的体系化（学問）に傲慢にならないで、純粋な精神の秩序¹¹⁾」を馬が示しているからといって、そこに彼の真意を読み取ってはならない。原始キリスト教には、もはや回帰することはできないとすれば、人間の文明にふさわしいキリスト教、例えば、英国国教が可能な選択だと Swift は考える。だから、実践の目標は別である。Houyhnhnms が Swift の理想ではなく諷刺の手段にすぎないことは、次のような文章を踏えれば一層明瞭であろう。自然の完全には人間はおよび得ないから、人間の営為の意味と生の励みの価値があるとする Swift がある。政治の安定や公正をめざして絶望の淵に立ったかも知れないが、人間に絶望した精神を想像させないものがある。

…The Motions of the Sun and Moon; in Short, the whole System of the Universe, as far as Philosophers have been able to discover and observe, are in the utmost Degree of Regularity and Perfection; But whenever God hath left to Man the Power of interposing a Remedy by Thought or Labour, there he hath placed Things in a State of Imperfection, on purpose to stir up human Industry; without which Life would stagnate, or indeed rather could not subsist at all.¹²⁾

もう一人の語り手の傑作 *A Tale of a Tub* の「三文文士」(huck writer) の言語レベルのアイロニーを挙げておく。「精彩にとんだ機知を駆使し、類似を挙げて論じていても、その類似はしだいに適切でなくなってゆく¹³⁾」と、Martin Price が指適するとおりである。

But the greatest Maim given to that general Reception, which the writings of our Society have formerly received, (next to the transitory State of all sublunary Things), hath been a superficial Vein

among many Readers of the present Age, who will by no means be persuaded to inspect beyond the Surface and the Rind of Things; whereas, *Wisdom* is a *Fox*, who after long hunting, will at last cost you the Pains to dig out: 'Tis a *Cheese*, which by how much the richer, has the thicker, the homelier, and the coarser Coat; and whereof to a judicious Palate, the *Maggots* are the best, 'Tis a *Sack-Posset*, wherein the deeper you go, you will find it the sweeter. *Wisdom* is a *Hen*, whose *Cackling* we must value and consider, because it is attended with an *Egg*; But then, lastly, 'tis a *Nut*, which, unless you chuse with Judgment, may cost you a Tooth, and pay you with nothing but a *Worm*.¹⁴⁾

自からの文名があがらないため、自己弁護として世評に文章の背後まで読んで真価を鑑賞して欲しいと訴えているのだが、比喻が次第に適切でなくなる。狐狩の狐はなるほど穴の中にひそんでいるであろう。チーズの奥に隠れた虫は、あるいは、大変美味であるかもしれない。牝鶏の鳴声はもはや牝鶏の内部とはいえなかりうし、くるみの虫は本人自身が歯を痛めるだけの値打がないと認めている。「知恵」が深層にあるとしても、とにかく、表層と深層の弁別さえも自分でできぬまま、自己弁護と称しているのである。意識の柔軟さを失って現実感覚を喪失し、さらに自己認識を欠いた点で *Gulliver* に準ずる欠陥を露呈している。それになりすましている三文文士の文章の中に、欠点を露出させたところが *Swift* の功績である。

Notthrop Frye は *Anatomy of Criticism* において *Gulliver's Travels* などの特徴を 'Menippean Satire'¹⁵⁾ という名称で要約する。メニプス諷刺は人物よりも精神の態度をその対象とし抽象的観念や理論を扱う。その点で告白に似ているが、性格表現は小説と異なり、対人関係の中でその行動を描くわけではない。また、ピカレスク小説とも、現実の社会構造に関心を持たないから、異なっている。「最も濃厚なメニプス諷刺は1個の知的類型に世界像を提示する。話から組立てられた知的構造物が、普通の物語の論理であれば大きな混乱と思われるものを埋め合わせる。その結果生じる、一見不注意と思われるものも、実は、読者の不注意を示すか、あるいは、小説を中心とした物語の概念によって読者が判断する傾向を反映しているにすぎない」¹⁶⁾ この定義に従うなら、人格的变化を全く遂げない『桶物語』の語り手はメニプス諷刺の規格に妥当すると思える。しかし、*Gulliver* は漂着した先の社会に関心があり、しかも経験をおして変貌をする。*Robert Elliot* の言うように、¹⁷⁾ 結局、「無批判に人に接する *Gulliver* が無批判に人間を憎悪する人間に変わる」のであるから、小説の主人公にみられる成長、すなわち、新しい観念の体現というに等しい構成が仕込まれている。

Gulliver の絶望は、*Swift* の絶望そのものではない。しかし、*Swift* の作品に繰返される「*Swift* 的絶望」すなわち「警告」というべきであろう。

2. *Swift* の政治の理念

Anglo-Irish の一人であった *Swift* にとって、アイルランド民族主義そのものに同化することは、もともと不可能であった。父の死後生れたことも、父と同様に聖職になる道を選ぶことは当然の方向であった。*William III* の勝利に寄せる期待は彼がいちやく発表した処女作、*Cowley* 流の *Odes* 二篇にあきらかである。¹⁸⁾ 一度 *Temple* の被護から独立するが、屈辱を忍んで舞いもどり、この *Anglo-Irish* の路線から遂に政治の舞台に登場する。その使命は *Queen Anne's Bounty* としてアイルランド教会への十分一税の確保を陳情するためであった。その時以来彼の政治への関心を第一に占めるものはアイルランド教会制度の擁護であった。その実現のために政権政党に接近したのであって、ウィッグ党からトリー党への変節とみられているものは、必ずしも彼の野心を証明するわけではない。むしろ、土地所有階級 (*landed interest*) を基盤にするトリー党の方が、教会制度を基盤を一つにしているため、*Swift* の理念と信条を理解できたはずである。加えて「政党支持については、*Swift* がトリー党に鞍替したというよりも、

1710年にはトリー党の方針が彼の信条に変わったというほうが適当であろう。1685年以前の基準に従うなら、彼の政治信条は「はっきり反トリーであった」¹⁹⁾というほどの政治状況の急変もあった。

彼の作品を評価する場合、文学の技法とともに、上述のような政治状況も考慮しなくてはならない。ここでは Irvin Ehrenpreis の上掲論文の援けを借りて彼の政治思想を整理しておく。

Swift は国家の自由をまず第一に挙げる。それは立法府に根拠を置かなければならない。そして、国家体制（政府と教会）に市民は帰属しなければならない、と考える。

The freedom of a nation consists in an absolute unlimited legislative power, wherein the whole body of the people are fairly represented, and in an executive duly limited.²⁰⁾

立法府は、公平に国民を代表し、無制限であり、執行については制限を受ける。しかし、立法権が誤って行使されたとき、国民は抵抗する権利があるとする信託権を容認する思想はここにはない。この点がロックの政治思想と異なる点である。

彼が政治へ接近し政治の中軸に至りえた時期の政治状況の特徴は、J. H. Plumb に従えば、17世紀の後期は、投票権をもち、政治へ参画することのできる国民階層が増大し、そして、1688年から1714年までの期間は英国議会史上まれにみる政治論争が盛んで、総選挙が頻繁に実施されたことの二つである。政治活動に示威行動も盛んにおこなわれたが、それにもまして、世論を自党の利益に動かすための文書活動も活発であった。²¹⁾しかし、三分割による政府という、いわゆる名誉革命体制については異論がなく、王党的性格を失って土地所有階級を基盤にしたトリー党と商工業階級を基盤にしたウィッグ党の間には、比較的無風な時代でもあった。その名誉体制の中で Swift が願った政治の理想とは、次のようなことだったとされる。

Swift recognized no limitation on the united legislature but divided it into three sections, which had to agree for their authority to be effective: a chief executive, the King; an aristocracy, the House of Lords; and the people, or the House of Commons. Each element of the government must live up to its responsibilities, but none might overstep its limitations. In all free states, the evil to be avoided is tyranny, that is to say, the *summa imperii*, or unlimited power solely in the hands of the One, the Few, or the Many. Out of the delicate tensions of these freedoms and strengths—the nobility often contending for power, the people for liberty, and the king for absolute dominion—arose the most reliable form of political liberty.²²⁾

これは、1689年 William III が即位した時に発せられた権利の宣言 (Declaration of Rights) によって確認された内容を彼なりに要約したものと言って過言でないであろう。その体制の特質が三分割 (Tripartite) に集約されて強調されているにすぎない。この政治観はトリー党に限ったものでなく、ウィッグ党が支配する18世紀を通じて、大部分の国民のものだったし、S. Johnson, E. Burke もまたこの体制の最善を信じていたであろう。

しかし、名誉革命体制を揺さぶる小さな事件が起きる。Sacheverell 事件である。彼は、ウィッグ党が非国教徒に対して寛容すぎると激しい抗議をおこなったが、Godolphine の率いる時の政府はこの事件をうまく処理することができず、糾弾はしたものの、この司祭をわずか3年の説教禁止の処分にし得たにすぎなかった。そのため、Queen Anne (r. 1702~13) が所属する高教会派 (High Church) の勢力を吸合する結果となり、内閣を Harley の率いるトリー党に譲ったのである。この小事件が倒閣を招来し得たのは、Anne 女王即位とともに始った戦争に対する経済負担への不満と厭戦に加えてウィッグ党の基盤とする商業資本 (moneyed interest) に対する土地資本 (landed interest) の反撥があったからである。Richard Steele (1672~1729) がウィッグ党のため発刊した *The English-*

man が貿易商人の国家経済への貢献としてその学識とを称讃するのに対して、Swift が尽力した *The Examiner* が国家の基幹としての土地所有者を擁護したことが、おそらく、わずかだが同時に決定的な対立だった。²³⁾

危期に際して名誉革命の原理に回帰しようとする例が後の世代にもみられる。

Edmand Burke (1729~97) は議会活動初期はトリー党を攻撃し、商業都市 Bristol の市民によってその地区を代表する議員に招請されたほどの自由主義者であった。しかし、ひとたびフランス革命の動乱を目撃するや、「権威と王権は市民のものである制度を横取りしている」として「自由の名によって帝王の権利に抵抗していた」にもかかわらず、「急進的な理想と市民運動の中に国家体制への脅威を認めて、それにまた抵抗した」²⁴⁾とされている。Swift と同様三分割の勢力の均衡が実際の国家の統一には必要であると考えたのである。両者とも「持場を動かさないで銃口を変えた」と言える。

Burke は、また、金権 (moneyed interest) に対して Swift ほどではないが、やはり、疑問をもっていた。事実、自由貿易をアイルランドとカトリック教徒にも解放すべしという主張を行なったためにブリストル地区の議席を失いヨークシアに移っている。国家体制の統一の点では、土地所有階級を新興の商工業階級の優位に置いた点で、1689年の名誉革命体制の議会参加は土地所有者に限るというトリー党の常套の主張理念の信奉者となった。

Swift の政治理念が後世の政治に反映したというわけではなく、彼が、保守的な政治理念を頑なに保持したことが重要なのである。名誉革命に集約された理念はその起源を17世紀にたどることができる。

Swift の政治理念も、その一つ一つをスチュアアート時代の政治理論に根拠を求めると Ehrenpreis はいう。政党よりも政府、立法府に優位を与えるのは Halifax 候 George Savils (1633~95) に負い、国民の宗教信条の統一を強調する点は、Thomas Hobbes (1588~1679) に準ずる。自由を合意による政府と同一視するのは、Philip Sydney (1554~86) に習う。Swift の主張する自由は中世的な面もあると論者は指摘する。²⁴⁾

中世の共同体 (Community) において土地所有と政治的権威は一体であったから、公私の明確な区分は消滅する傾向があった。中世の政治体制の特徴は、絶対化された人間的権威が存在しないで、それに代って慣習法が優位を占めたこと、政治権力は直接住民から派生することであった。政治体制の首長としての中世の王は「あくまでも一人の人間」であってその職権に「神授の権利」が保証されていたのではない。悪政には抵抗することが可能であって、不正な権威に対する抵抗は騒乱ではないと、聖トマスも説いた。²⁵⁾

王、貴族、市民の三権の合意と相互規制による政治体制を理想とした Swift にとって、その調和を求める二つの方法があった。一つは、社会の各階層が相互に調和を維持する中世的均衡である。他は相互の対立することを認め、そして、議会を優先する方法である。また、アイルランドの擁護のためにした彼の発言には、その百年の後のヨーロッパの政治状況を特徴づける民族主義の響きがこもらざるを得なかった。それは、彼自身の国民の総意を含んだ調和ある共同体という理念に矛盾する姿である。ある党派の正党な権利が他の党派の等しく正当な権利と対立することを承認することである。中世的理念においてであれば、個人と組織は自由において対立しないであろうし、組織の自由の拡大はそのまま個人の自由の増大となるであろう。しかし、近代においては、政治理念の上の国家は個人の自由の抑制にしか機能しないから、国家構造と市民活動を、三分割 (Tripartite) の均衡によって、同一視したとき、Swift は「論点摂取の誤謬」を犯したことになる。この両立し得ないことを、「自由」という語で等しく語ったのである。

Ehrenpreis は Swift の政治理念の欠陥をこういう表現で述べる。

Yet he had to allow for the reality. When he dwelt upon the balance of powers characteristic of a free mixed monarchy and thereby settled the location of national sovereignty, he was admitting that the

new age involed essentially conflicting interests within society, a fact inconsisting with his dislike of factions. In so resolving the sovereignty, however, he revealed again a medieval incomprehension of it. Swift was open to the same objection which under the early Stuarts any royalist might fairly have made to the embryonic theory that potestas suprema lay in the King in Parliament: in effect, it left the state with no sovereign at all, unless King and Parliament were in agreement. A distributed authority cannot be absolute and recalls the midieval disregard for the whole issue of sovereignty.²⁶⁾

(イタリックスは筆者)

三分割体制に均衡をもとめるかぎり、議会在優位に立ち政治はその理念の発展ではなく、政党の指導が中心となる。それは現実的要素に動かされざるを得ない。その後、産業革命、植民地支配と内外二つの大きな要素が、ウィッグ党の主導のもとで、英国を動かし、トリー党は衰微していったのは当然の過程であった。

3. むすび

Anne 女王の死去とともに Harley 内閣は倒解する。Harley とともに1689年の体制に寄せる理念の絶対を信じた Swift には Hanover 体制の出現には何事の期待もいかなかった。言い換ると、過去の幻影を追いながら諷刺に耽るほかなかったのである。Ehrenphreis は Swift の中に Gothic 的諸制度に対する近親感を発見しているが、彼の幻想の中には Gothic の壮麗な教会も聳えていたにちがいない。石のおのおのが、それぞれの主張をもちながら同時に一つの様式の中に調和している。しかも、その調和は無限の天空を求め、いわば神を希求しているであろう。諷刺の源はそこにあり、彼は現実を逆説でもって否定することに耽溺したのである。そこにあらわれるのは、現実を eschatology として構図しようとする意志である。もともと諷刺によるかぎり建設的な未来への夢は描けないのだから。こう考えれば彼の scatology は伝統的な終末観における memento mori にちがいない。²⁸⁾ 排泄物は攻撃的な、Yahoos にとっては武器であったが、それに関心をもって描かれているラガードの科学者やステレフォン、アイランドの議員は、彼の筆に描かれるとき、神の恩寵から見放された人間の終末相である。

1714年彼の栄光の時代の幕が閉じたとき、Swift は次のような断片をわざわざその前に置いて、一つの自画像を書いている。'Hag' とは The Duchess of Smmerser, 'Royal Prude' は Anne 女王その人、Crazy Prelate は Sr. Sharpe, Archbishop of York と H. Davis は注釈している。²⁹⁾

By and old red-Pate, murd'ring Hag purs'd,
A Crazy Prelate, and Royal Prude.
By dull Divines, who look with envious Eyes,
On ev'ry Genius that attempts to rise;
And pausing o'er a Pipe, with doubtful Nod,
Give Hints, that Poets ne'er believe in God.
So, Clowns on Scholars as on Wizards look,
And take a Folio for conj'ring Book.³⁰⁾

これに続くのは自己弁護であるが、彼自身の政治生命の終焉の requiem というべきか。

Swift had the Sin of Wit no venial Crime;
Nay, 'twas affirm'd, he sometimes dealt in Rhime:
Humour, and Mirth, had place in all he writ:
He reconcil'd Divinity and Wit.³¹⁾ (II, 1-4)

この自画像に残る「苦い経験」にもかかわらず、Swift は文学の方法も政治の理念もかえなかった。なるほど、散文と詩の題材は、時事的なもの、一時的なものから普遍的なものへと変っていく、——例えば、*Gulliver's Travels* (1726)のように、その背後に直接の経験を踏まえながら、その時代を超える真実を訴えるにはちがいない。だが、方法と感性とは頑くなくかわらない。たぶん、かえられないと言うべきであろう。逆説の構図はつねに終末の相を示すアイロニーである。そして政治の理念とその感性とが幸福な一致をみせるのは、Wood の悪貨を告発し、追放することに成功をおさめた *Drapier's Letters* (1725) であった、ということができる。

注

- 1) 岡崎祥明, 『スウィフト研究——諷刺の生成と変容』(南雲堂, 1978) p. 32.
- 2) Herbert Davis, *The Prose Works of Jonathan Swift*, II, (Blackwell, 1957) pp. 24-5. 以下 HD と省略して示す。
- 3) HD, X, p. 16, p. 29.
- 4) HD, II, p. 26, p. 35.
- 5) HD, XII, p. 115.
- 6) Frederick Engels, *The Conditions of the Working Class in England*, (Panther, 1969) pp. 309-312.
- 7) Robert C Elliot, *The Power of Satire*, (Princeton, 1960) Chap. IV. p. 130.
- 8) *ibid.* p. 214.
- 9) HD, XI, p. 287.
- 10) HD, XI, p. 296.
- 11) Martin Price, 'Swift: Order and Obligation' in Frank Brady, ed. *Twentieth Century Interpretations of Gulliver's Travels*, p. 95.
- 12) HD, IV, p. 245.
- 13) Martin Price, *Swift's Rhetorical Art*, (1953) p. 91.
- 14) HD, I, p. 40.
- 15) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism*, pp. 309-12.
- 16) *ibid.* p. 310.
- 17) Elliot, *op. cit.* p. 190.
- 18) *Ode to the King on his Irish Expedition*, (1690), *Ode to the Athenian Society*, (1692).
- 19) Irvin Ehrenpreis, 'Swift on Liberty': *Journal of History of Ideas*, Vol. XIII, No. 2, (1952) pp. 140-6.
- 20) Swift Corr., III, 121. quoted by. Ehrenpreis *op. cit.* p. 132.
- 21) J. H. Plumb, *The Growth of Political Stability in England 1675-1725*, (Penguin, 1973) pp. 10-11.
- 22) Ehrenpreis, *op. cit.* p. 143.
- 23) 山口孝道「名譽革命体制期におけるウィグ派の政治論について」『歴史学研究』第367号p. 25.
- 24) Ehrenpreis, *op. cit.* p. 143.
- 25) Carlyle, A. J., *Political Liberty*, (Oxford, 1941) pp. 12-13, quoted in Ehrenpreis, *op. cit.*
- 26) Ehrenpreis, *op. cit.* p. 145.
- 27) *ibid.* p. 145.

- 28) 野島秀勝「憤怒の遠近法」『ユリイカ』Vol. 9, no. 6, (1977) p. 99.
- 29) 'The Author upon Himself,' Herbert Davis, ed. *Swift-Poetical Works*, (Oxford, 1967) p. 147.
- 30) 大意「赤毛のばばあに追求されました。狂った一人の高僧と王座におわす心細やかなお方にも。世に出ようとする才能をすべて羨望の目でみながら，パイプの煙をくゆらせて立ちどまり，うさん臭くうなづいて，詩人という手あいは神を信じぬとほのめかす。そういう神学者にも。だから，純朴無骨のともがらは魔女をみるように学者どもをおそれ，二つ折り本を魔法の書だと思うのです」
- 31) 大意「スウィフトは軽からぬ罪，機知の罪を犯したのだ。いいえ，それはちがいます。詩はときたまものにはしましたけれど，彼の書いたものには滑稽とそれに笑もちゃんとあるのがわかっています。神と機知とを調和させたのです」